

キリシタンの日本語学習

—— マノエル・バレトの注解を中心に ——

森 田 武

一

十六世紀後半から十七世紀初頭にかけて、わが国のキリスト教伝道に従った外国人宣教師の中には、日本語に熟達した人が少なくなかった。かの大小二部の日本文典の著者として知られるジョアン・ロドリゲスをはじめ、一五五一年ごろ、山口でコスメ・デ・トレスの通訳をつとめ、仏僧と宗論を戦わせ、後に日本文典と日葡・葡日辞書を作ったというジョアン・フェルナンデス、一五九二年版信心録の邦訳者ペロ・ラモン、後述のマノエル・バレト等々があり、ほかにも日本人信徒の懺悔を聴いて教誨を加え、かつ説教をなし得る程度に達した人は珍しくなかったようである。しかも、比較的短期間に、人によっては相当に早く上達したらしい。

当時、彼らの要求を満たすべき学習書はなかったので、新たに教科書や文典・辞書を編纂し刊行したのであった。それらの書が新来の

宣教師の日本語学習を助けたことは疑えない。しかし、実際にどのようにして学習したのかという点になると、わからない事が多い。ロドリゲスは、日本小文典の第二章に「日本語の学習法並に教授法」を説いている。これは当時の実情を反映しているには違いないが、主として教師論・教材論の立場から教授法のあるべき姿を論じたものなので、今は必要に応じて参考するにとどめ、僅かながら辿られる一キリシタンの学習の跡を尋ねることに重点をおきたい。

二

ロドリゲスは、右の小文典第二章に、日本語に上達する主要な方法二つをあげる。第一は、日々日本人と交わり、日本語を使うことによつて自然に学び取るものであり、第二は、短期間に外国語を習得しようとする場合に普通な方法であつて、教師について純粋典雅な言葉で習かれた書物の講義を受け、それとともに適宜練習をしな

がら文法的規則を学ぶところの方法である〔二丁裏〕。

わが国の伝道初期にあつては、当然第一の方法のみによらざるを得なかつたであらう。フランシスコ・シャヴィエルは、鹿児島からゴアの耶蘇会士に送つた一五四九年十一月五日附の書翰に、次のように書いてゐる。

若し私達が日本語に堪能であるならば、多数の者がキリストへの聖教に歸信するやうになることは、絶対に疑ひを入れない。どうぞ我等の主なる神が、早く私達を日本語のできる人間にして下さらんことを祈つて止まない。⁽²⁾

ここには言葉の通じない苦惱が出ており、それは新来の宣教師すべての痛切な祈りであつたらう。前出のフェルナンデスにしても、シャヴィエルに随つて来朝した当初は、やはり言葉の不自由を歎じ、たに違いない。

一五六八年十月四日附發ルイス・フロイスの書翰によれば、堺において浄土宗の長老で五十歳ばかりの大学者で医師なる者 (*Grande letrado, & fisico*) が殆んど毎日來訪し、ために日本語の修練 (*exercício da lingua*) と、宗旨に関する學者の質問に応答する上に助けとなることが少なくなつたといふ。⁽³⁾ 來朝後六年目にあたり、既に懺悔を聴き、説教もしていたフロイスでも、なお日本人について修練を怠らなかつたことがうかがわれる。

巡察使アレッシャンドロ・ワリニャノが來朝して(一五七九年)、わが国の布教対策を確立し、セミナリオ(神学校)・ノビシアド(修練院)・コレジオ(学林)など学校を設置したところから、外来宣教師の日本語教育もやや組織的に行われるに至つたものようである。

フランシスコ・カブラルの一五八一年九月十五日附耶蘇会総長宛書翰は、開設直後の府内コレジオの状況を次のように報じてゐる。

コレジオには会員が十人居る。内三人はパードレで、其中の一人はラテン語の教師である。ラテン語の授業の外に毎日日本語の授業がある。彼等に教へる日本人イルマン・パウロは、日本語並に文章に達し、書物の翻譯に依つて基督教會の爲に大に尽した人である。⁽⁴⁾

このパウロは、有名な養方軒パウロであつて、その豊かな学殖をもつて聞え、右の記事に見えるとおり、耶蘇会の編纂事業に大きな貢献をした人で、一五九一年版サントスの御作業には翻譯者の一人としてその名が明記されている。

フロイスもまた、その著「日本史」の中に、同じころの事をば次のように書きとめてゐる。

巡察使伴天連は、耶蘇会士たらんとする者は、ノビシアドの修業期間を終え、試験を終た後に、さらにコレジオで勉強できるところが必要であるとして、この町八府内Vに一つのコレジオを創設した。そのコレジオは、司祭三人、伊留滿十人、都合十三人の耶蘇会士を以て開かれた。イルマンには二つの教科が課せられた。

一つは人文學(*humanidade*)であり、他はヨーロッパイルマンの爲の日本語(*lingua de Japão*)である。初年度に於いて、その年の終りには早くもキシタンへの説教を始めたので、イルマンの日本語学習を容易にする爲に非常な努力がなされ、その結果彼らは非常な進歩を示した。又、同じ目的のもとに、既に著されていた文典(*Arte*)の完成に努めるほか、一つの大部の辭書(*humoroso* *Vocabulario*)を編纂し、日本語の通俗平易な會話書數篇

(alguns Dialogos faciles, e familiares na lingua de

Jaipão)を作った。これらの書物によってイルマンたちは非常に助けられた。(5)

これらの記述によれば、ヨーロッパ人イルマンは、布教の実務につく以前に、一定の期間コレジオにおいて日本語の学習をすることになっていたらしい。それには養方軒パウロなど日本人の教師について、コレジオ編纂の話し言葉の教科書や文典・辞書などを使って学んだものと考えられる。

一五八三年度の耶穌会年報(一五八四年一月二日附フロイス筆)によれば、説教師不足のため、コレジオの長は、日本語の進歩著しいヨーロッパ人学生三・四名を、諸所の聖堂に派して説教させるという処置をとったが、それは一般に成功であったという。(6)この記事によっても、時に日本語に上達した者が説教師の応援に派遣されることがあっても、学生の本務はコレジオにおける日本語その他の学習にあったことが察せられる。

右の事情は、後年も同じであつたらしく、一五九二年十一月現在日本副管区内居住耶穌会士名簿には、天草のコレジオとノビシアドの条下に、ポルトガル人イルマンが「日本語を特に学ばんとす」ることを録し、一六〇七年二月の名簿にも、有馬のコレジオで二名の歐洲人伴天連が「言葉を学びつつあり」と注記してある。(8)その修業期間は不明であるけれども、右の両名が一六〇七年十月の名簿では、それぞれ島原と上京の駐在所に配属になっているのによれば、一年間前後ではなかつたかと想像される。(9)

なお、さきの一五九二年十一月現在の名簿には、マカオの神の母(Madre de Deus)の教習で、三人の外国人伴天連が「日本へ赴

く為に日本語を学びつつあり」と記されている。(10)派遣地が決定すれば、できるだけの準備はしたのであるが、マカオに日本語教授の施設ができていたかどうか疑問である。渡航の便船を待つ間、何らかの書物によって学ぶか、かの地に日本語に堪能な人が居合わせる場合に、就いて学ぶかするというのではなかつたらうか。

三

マノエル・バレット(Manoel Barreto)も同様の課程をふんだらしい。彼は一五九〇年七月二十一日、再度来朝したワリニヤノや、使命を果たして帰国する遣欧青年使節の一行とともに長崎に上陸した。同年十月二十二日附長崎発フロイス書簡は、巡察使伴天連と共に来朝した伴天連や伊留満たちは加津佐のコレジオで日本語の習得に努めていると報じている。しかるに、シュッテ師は、耶穌会本部所蔵のA. Lucena筆の記録に拠つて次のように述べていられる。

一五九〇年七月、彼が長崎の港に到着した時、彼が他の新来の宣教師たちといっしょに肥前国大村の近くの坂口に送られたことは明らかで、それはそこで日本語を習う為であった。ある日本人のイルマンがその教師であった。彼等の勉強した家は、或る復讐行為のため、数ヶ月後に焼け落ちた。そこで、しばらくの間大村のフショウ寺(Fuzonji)に移ったが、会が坂口に新しい建物を造つた後、一五九一年の復活祭の第一日にそこに帰ることができた。(11)

これと前のフロイスの記述とは違つている。Afonso de Lucenaは、一五七八年来朝以来大村に居たようであり、一五九二年十一月には坂口に居たので、その記述は信じてよさそうである。右の相違をいかに解するかは、なお他の資料の検討にまたねばならないが、

ともかく来朝直後日本語学習の課程を終たことは動かない。バレットは、一九二二年十一月には天草学林のラテン語教師になっていたが、任命の年月はわからない。従って、日本語の修業期間も不明であるけれども、シュツテ師の想像のごとく一年くらいではなかつたらうか。

バレットは、その修業期間中かその直後に大冊の文書集（ローマ字書き日本文）を筆写しており、今日ヴァチカン文庫に残っている（Reg. Lat. 449）。これについては、早くシュツテ師の論文がある上、最近「キリシタン研究」第七輯に原文前半の複製と各方面からの詳しい研究が公にされたので解説は省くが、これに彼の日本語学習の跡をとどめているのである。

即ち、この文書集の行間や欄外には多くの注解が加えてある。一三二丁から一五五丁までの本文は別人の筆であるけれども、注はその部分のもバレットの自筆である。従って、先行の写本により本文を書写した後、これを読解する際に注記を加えたものと察せられる。

その注は、少数の参照注記や異文の注記らしいものは、すべて本文中に含まれている語の注解である。その一部を類別してあげてみよう。上の傍線部分に……以下の注が加えてあることを示し、注の中「」内は日本語、その他は葡語の邦訳であることを示すものとする。

(一) 葡語で注を加えたもの

- 先づ括弧……類の所を結び繋ぐ。△148△
 流されたる……流す、滴らす。△174△
 亡所……もとは人が住んでいたが、今は住む人もない所。
 △84△

人の居丈程……一人が抱え得るだけ。△128△
 「居丈」を「抱け」と誤解したものらしい。」
 (二) 日本語で注を加えたもの

憔悴……「瘦せ、衰エ。」△144△

油却して……「死ル。」△165△

世界の終りに……「改マラン時。」△97△

この場合(一)(二)を併用したものもある。

勘定……「算用。」計算。△164△

異形……「異ナ形。」驚くべき。△138△

黨部衆にいざなはれて……「誘ワレテ。」伴われて、
 連れられて。△153△

△153△

(三) はやさしい日本語で注するのが普通であるけれども、その逆の場合もある。

その所に居らるべし……「在国セラル。」△88△

ためしなき……「比類ノナイ。」△72△

声を上げ……「言上、高声」または、「大音、大音声、音

声。」△36△

(四) 漢語の熟語を構成要素に分けて訓釈したもの

沈酔……「沈、シヅミ」「酔、ヨイ、ウ。」酔いづぶれる。
 △124△

放火……焼く。「放一ハナシ」「火一火。」火。△41△

返弁……「返、カエシ」「弁、ワキマエ、ル。」支払う。
 △42△

軍兵……「軍一イクサ」「兵一ツワモノ。」△43△

△43△

四類義語を關連的に示したものを

雌鳥……牝雞。「ヲドリ(雄鳥)」は牡雞。

夙夜……「ヨルヒル。夜日、夜白、明ケ暮レ。」「終日」は「

日中の意。「終夜」は一晚中の意。「ヨツピトイ(夜一夜)、

夜モスガラ。」上と同義。〈934〉

実生らず……「実ナリ、ル。」果実がなる。「フトリ、ル。」

樹木が成長する。〈884〉

右は本文中の語に注したのを縁として、それと類義の語を対照して示したものである。

四動詞の活用を示したもの

病んで……「病ミ、ムー病ウデ。」〈404〉

這ふべし……「這イ、ウ。」〈144〉

封じて……「閉ツル」「封ジ、ズル。」—それを蠟で封する

意。〈154〉

或いは枴ち……「觸リ、ル。」〈464〉

風聞して……「聞エ、ル。」〈884〉

缺如すべし……「事缺キ、ク。」〈944〉

内文法的説明を付したものを

力を授け給ふよ……「ヨ」は助辞(Paricula)である。

御繩とこそ申し奉るべけれ……「トコソ」は「手爾波」

(tenifi)である。〈784〉

我が子を治し給はん為に……「癒ヤシ、ス。」治療する意。

「癒エ」はその受動動詞(passivo)である。〈424〉

マリヤ浄められ給ふ日救達しければ……「淨イ」は清浄なもの

の意。—これは動詞(verb)をつくる。〈844〉「原文の「達

し」に付けてあるが、実は「浄められ」に対するもの。「浄

い」の語幹が「浄ムル」という動詞を構成することを説く。」

以上各種の注は、本文を読み、日本語を学習する際に書き入れた

ものらしい。他から教えられたのが多いであろうが、誤解に基づく

ものも混在しているのは、自ら調べて記入したものを含むのかも知

れない。

四

バレットには、ほかにも学習の跡を示す資料がある。大英博物館蔵

一五九二—一三年本草版平家物語・伊曾保物語・金句集合綴本(以下

「本草版平家」と略称)の本文中の書入れ、並びにその巻末に付せら

れた書入れの難語句解六四頁がそれである(以下「平家書入れ」と略

称)。それが本草版平家の本文に対する注であることは明証があっ

て、一九五三年以後の書入れであると知られるから、前述の自筆文

書集より少なくとも二年はおくれてできたものである。恐らくは、天

草学材にラテン語教師として在任した時代に、なおも日本語の学習

に励んだ跡を示すものであろう。

この平家書入れを見るに、前節にあげた注の各種類をすべて含ん

でいる。一々例証をあげる余裕がないけれども、(一)(二)の類は珍し

くない。読本の講読における最も一般的な方法であったのだろう。

漢語の訓釈を示す(三)などは、一五九一年版サントスの御作業の和げ

(難語句解)に統一的に付せられたほか、

「牙盾」「ホコタテ」「武器の意。」「ドチリナ・キリシタ

ン、和げ」

「所望。」「ノゾムトコロ。」「信心録、和げ」

「万物。」「ヨーロッパモノ。」「コンテンツス・ムンヂ、和げ」のように諸語に見え、日葡辞書にあつても一般的である。落葉集本篇もまた音・訓を併せ示すたてまえをとっている。當時わが国で普通に行われた漢語の説明法をそのままとり入れていたのである。

前節の(二)、日本語による注解法も、恐らく教授の場においてとられたものである。諸版本の和げを検するに、サントスの御作業やドチリナ・キリシタンの和げにあつては、同義語・訓釈のいずれか一方あるいは双方をつけた上に、各条に必ず葡語訳を添えたが、天草版平家の和げになると、日本語のみの説明が多くて葡語訳は少なくなり、信心録やコンテンツス・ムンヂの和げでは、日本語の説明のみを付けるのが原則となつてゐる。主として「言葉稽古の爲」(総序)に編まれた天草版平家はもちろんのこと、宗門書といえども、一面また「日本の言葉^レを習はるべき為」(信心録序)のものであつた。従つて、その和げも教育的意図を含んでいたろうことを認めるならば、日本語の日本語による説明が、日本語学習の一方法としてかなり重視されたであらうと想像される。

同義語をあげて説明するのは、また、当面の語に関連して類義語などを併せ示す四の方法とも通ずる。ワリニヤノは、第一回来朝後にまとめた視察報告書(一五八三年十月二十八日附)の中で、日本語はいずれの国語よりも優秀であり、典雅にして豊富(elegante y copioso)であると述べ、同一の事物を表すのに多くの語があること、敬語法の発達していることにも言及している。これらの点は、早くから外国人宣教師の注意をひいていたのである。ロドリゲスも大文典の初めに同様のことを述べ(四丁裏)、小文典では、日本語教師は博学な日本人でなければならぬと主張する。その理由の

一つは、ヨーロッパ人は、授業の際に本来の正しい語句や同義語(frases & sinonimos proprios)を示し得るほどには豊富な語彙を知つていないからだといふのである(三丁裏)。このように、日本語の特徴を認め、それに対処する教育の一方法として、同義語をもつて説明し、機を見ては類義語を示すといふ配慮を加えたのである。平家書入れにも、

「時刻。」時刻の意。「時分」に同じ。(四頁左欄)

「一際。」「一段、トット」に同じ。大いに。「一際精ガイリマラシタ。」全精力を注いだ。(二二頁左)

「野心。」即ち、「謀叛、別心」に同じ。叛逆・不義の意。

〔六四頁欄外〕

のような例があり、諸版本の和げにも、

「面目。」^{シボウ}「マユ、メ。」即ち、「面目。」名譽の意。(ハサントスの御作業、和げ)

「后妃。」「帝王ノ妻」で、即ち、「キサキ(妃)」、「皇后の意。(ドチリナ・キリシタン、和げ)

「朝夕。」「アサユウ」、即ち、「イツモ。」(信心録、和げ)

「所知。」「知ル所」、即ち、「知行。」(コンテンツス・ムンヂ、和げ)

のような例が稀ではない。

また、天草版伊曾保物語は、「日本の言葉稽古の爲に便りとなる」(序)べき教科書として編まれたのであるが、その本文中近接した個所に、「肉しむら」(四四五頁)、「京一都」(四四七頁)、「老人ノ年寄」(五〇一頁)など、同義語を対照的に用いたのが注意をひく。これも同じ教育的意図に基づく意識的な処

置と解することができるであらう。

同じく例の、「雌鳥」に「雄鳥」を併せ示したような関連語提示の例は、和げには見えないようであるけれども、平家書入れにはいくつも例がある。

「下巻。」書物の最後の巻。第二の巻を「チュウケツワン(中巻)」、第三の巻を「下巻」という。この言い方は三巻以下の時に用い、それ以上の巻がある場合には、「第イチ(一)巻、第二巻」などと教えるのである。〔二五頁右〕
「トモンビ(灯)」「ヲカキタツル。油でともす灯火の芯を切ること。「カカゲ、ル」も同義。蠟燭の場合であれば、「芯ヲ取ル」と言う。〔五六頁左〕

これなども教授の場で関連的に示されたのを書きとめたのかと思われるが、そう解してもよいならば、豊富に日本語の語彙を少しでも多く、そして正しく習得させる手段として、いろいろな機会に類縁を求めては語彙の拡充をはかったものであらうと思われる。

後の日葡辞書にも、前述の日本語による説明、漢語の訓釈、同義語などを示すのはもちろん、標出語の関連語をあげたものも少なくない。一例を *trigo* (独活) の条にれば、食用になる草の一種と説明したあと、既に芽は出ているのだがまだ土中に埋もれているのをウドというのであって、いくら地表に伸び出たのはドゼン、さらに伸びたものはこれをシカという旨の説明を添えている。日葡辞書の編者は、利用者が或る語を引いた場合に、それに関連のある語をも知り、語彙を豊かにすることを念としてかかる説明を加えたと思われる。「マサ(梗)」の条に「イタメ(板目)を見よ」とか、「ケミヤウ(仮名)」の条に「ジツミヤウ(実名)を見よ」とか注した参

照注記も同じ意図に出たものに違いあるまい。

一五九五年版拉葡日対訳辞書も、「拉丁語を学ぶ日本の青年及び日本語を学ばんとするヨーロッパ人の使用の便宜の爲」(標題)に出版され、事実「ヨーロッパから渡来した者の日本語学習に大いなる便宜を与えて来た」(日葡辞書序文)という。この辞書に示された日本語対訳は、例えば、*Erasmus* の条に葡語 *Erasmio* をあげたあと、「刀、劔、利劔、ツルギ」の諸語をあてたように、同義語を豊富に並べあげた点に特色がある。互に近似した意味の語を並べることによつて、できるだけ原拉丁語の意味を忠実に伝えようとしたことも認めなくてはならないが、また一面外国人利用者の日本語学習を助けるための用意もあつたのではなからうか。

かように考えられるとすれば、同義あるいは類義の語や関連語を示すのは、実際の教授の場における基本的な一形式をなしていたのであらう。そしてさきあげたバレット注記の諸例証は、直接教師の説明を承けたと否とにかかわらず、そうした学習方法を反映したものと見られるであらう。

五

前掲(四)の動詞活用を示す例は、平家書入れにも、「余リ、ル」「失セ、スル」「越エ、ユル」など一五七例が見いだされる。中に、平家本文中の名詞「爪木」を探りながら、「ツマギ、ゲ」と標出し(三頁左)、「日附」を「日附ケ、クル」(二二頁左)として、動詞としてしまった行き過ぎが七例までも存する事実は、動詞とさえ言えれば先ず活用を考える習慣になつており、またそのようにしつけられていたことを思わせる。動詞を連用・終止二形で標出した例は、サントスの御作業やドチリナ・キリシタンの和げにも見え、やはり当

時の教授法の反映と見るべきであろう。右の二形を以て動詞活用の種類分けをすることは、後のロドリゲスの文典に詳しいが、同様の扱いは、既に早くから行われ、また教えられてもいたのである。

終りに内の文法的説明も、平家書入れに類例がある。即ち、*particularia* (助辞) と注したものは見えないけれども、*tenifa* (手爾波) と注したものは、「相譲ル」〔三頁左〕の「相」、 「浮キヌ」〔五九頁右〕の「ヌ」、 「ゲニ」〔一三頁左〕などを含む十三例を数え、自筆文書集と共通の術語が使われているのである。ロドリゲス大文典には、ただ語調を整え装飾とすにすぎない助辞に「手爾波」の名を使い、その点にわが国の歌学系統の手爾波説の影響が認められる。バレットのもののような「ただ莊嚴までのもの」に注したとおぼしく、これによって、ロドリゲス以前にかかる扱い方が既になされていたことが推測される。

前掲の自筆文書集の注で、「儼ヤシ、ス」に並べあげた「儼エ」に *passivo* としたのは注意を要する。これと同じく自動詞を *passivo* としたものに日葡辞書がある。例えば、「取レ、ルル、レタ」を「取リ、ル」の、「亮レ、ルル、レタ」を「亮リ、ル」の *passivo* とするなど。

一方、平家書入れでは、同類の自動詞を、

「伝ワリ、ル。」中性動詞 (*verbo neutro*) であつて、引續き伝来する意。「伝エ、ル」は能動動詞 (*activo*)。「参ル。」〔五五頁右〕

と説明してある。*activo* と対せしめた点は *neutro* を *passivo* とし類としたかに見えるが、*neutro* は他に二例〔二三頁左・三三頁〕あつても *passivo* は一例もない。後者の例がないので確かな事は言え

ないが、*neutro* の三例とも受身の動詞でないことを以てすれば、*neutro* 即ち *passivo* としたものとは考えにくい。ロドリゲスは中性動詞 (*verbo neutro*) を詳細に説いて (六八丁裏以下)、上掲諸例の自動詞はそれに属するのであつて、それを *passivo* と呼ぶことはない。ロドリゲスの *passivo* (受動動詞) は、動詞に「ル」 「ラ」のついたものなのである。かくて術語の上で、平家書入れのはロドリゲスの所説に近く、自筆文書集のはロドリゲスとは違い、日葡辞書に近い。従つて、同じバレットの注でありながら、自筆文書集と平家書入れとの間には違いがあるわけで、約二年を隔てた前と後とに、文法の見解を異にする人の教授を受けたのもあろうかと考えられる。

サントスの御作業の和げには、「悔イ、悔ユル」に対して欠陥動詞 (*Verbo defectivo*) と注してある。これは拉丁あるいは葡語文法の適用であつて、一定の時・法の形を欠く動詞をいう。日葡辞書にも、「悔イ、悔ユル」と分詞「悔イテ」以外の形をもたぬ欠陥動詞だとある。もちろんロドリゲス大文典には詳しく説いてあるが (四五丁表)、それよりも早くから説かれ、また教えられていたものらしい。

今は文法的所説の検討が目的ではないので、多くは例証をも省いて簡単に述べたが、バレットの注に見えるところから推せば、講説の際にこうした文法的説明もなされたのであろうと推察される。ロドリゲス小文典に、教授上の注意として述べた次のような一節がある。

文法や学習すべき文法上の規則、並びにその際を守るべき順序に關して言えば、第一に必要なことは、教師自身が文法に通曉し

ていて、授業中好機を捉えて生徒に文法上の法則を覚え込ませるよう努めることである。それには、法則やきまりや品詞の用法などを口で言っていて、それを誦誦反復させたり、あるいは書物の講読をしてやりながらその法則・きまりなどを指摘させたりして、生徒の頭に入れてやるのである。文法は、或る時は甲の部分、或る時は乙の部分教えるがよい。そのように一個所に停滞しないようにする。そして、活用と若干の事項とは別であって、覚えさせねばならないが、それら以外の文法のきまりは、語記して学ばせるのでなく、書物の講読の際に覚え込ませようにしてやるのである。というのは、この方法によれば、日本人同様にしてやりと生徒の記憶に残るからである。〔五丁表〕

これは教授法に対する意見として述べているのではあるが、パレトの注記は、これに近い方法で教えられたことを示すのであろう。

日本語の教師は、主として日本人であった。前述の養方パウロがそうであるし、パレトらが坂口で習ったのも日本人伊留満であった。また、一五九二年十一月、天草学林の日本語教師であったウンギョ・ハビアン(不干齋)と高井コスメも日本人である。ハビアンは少し拉丁語を解したけれども、パウロやコスメは日本語以外は解しなかった。ここで疑問になるのは、概して拉丁・葡語を解しなかった日本人教師が、果して拉丁あるいは葡語文法に基づく欠陥動詞や中性動詞ないしは受動動詞などの文法的説明までし得たかという点である。「手簡渡」の術語にしても、日本人でなくては教え得なかったとまでは言い切れない。ロドリゲスが、小文典で、日本語教師は日本人であるべきことを力説している中に、「今日までそれが普通であったようにヨーロッパ人であってはならぬ」(……& nam Euro

peos (omo atekora correo)。(三丁裏)と言っているのは、歐洲人の教師も居たことを思わせる。右の直前に、「後になつて抜き難い不正な悪習 (habitos ruins de impropriedade) に染まぬために」と理由をあげているのによれば、初級の段階についての立言らしく、かれこれ合せて想像すれば、教授用語に葡語をまじえる必要のある初級などでは、歐洲人教師も協力したのではなからうか。あるいはまた、特に文法は、拉丁あるいは葡語文法に準拠して説く關係上歐洲人が分担したか、ともかく何らかの形で関与したのではないかと疑われる。

以上で蕪雜ながらこの稿を終ることとする。なお細かに考察すべき点もあり、平家誓入れに重点をおけばなお言及すべき事もあるけれども、それらはほかの機会に譲ることにしたい。

〔注〕

(1) 岡田章雄「キリシタン・パテレン」四五頁。土井忠生

「吉利支丹語学の研究」三五頁。

(2) アルペ神父・井上郁二訳「聖フランシスコ・サビエル書翰抄」下、三〇頁。

(3) 「大日本史料」第十編の一、二三頁。村上直次郎訳「耶穌會士日本通信」上、四一八頁。

(4) 村上直次郎訳注「耶穌會の日本年報」第一輯、一六八頁。

(5) P. Luis Frois, S. J., Segunda Parte da Historia de Japan, Tôquio, 1988, pp. 178-9. 土井忠生「吉利支丹

文獻考」一三七-八頁。

(6) 前掲(4)の三一八頁。

- (7) (8) (9) (10) 土井忠生「吉利支丹文献考」三二八・三六九・三七七・三八〇頁。
- (11) 太田正雄「日本吉利支丹史鈔」二二一頁。「木下李太郎全集」第六卷、一六六頁。
- (12) Joseph Schütte, S.J., *Christliche japanische Literatur, Bilder, und Druckblätter in einem unbekanntem Vatikanischen Codex aus dem Jahre 1591.* (Archivum Historicum Societatis Jesu. Vol. I X.) S. 236.
 同右「ヴァチカン図書館所蔵バレット写本について」(キリシタン研究、第七輯) 一三頁。
- (13) P. Luis Frois, S.J., *Die Geschichte Japans.* Leipzig, 1926. S. 504. Anm.
- (14) (15) 前掲(7) 三二七・三二八頁。
- (16) 前掲(13) / S. 236. 一三頁。
- (17) 前掲(12)、及び「キリシタン研究」第七輯所収「J. F. Schütte, 土井忠生、H. Cieplik 三氏の論文」。
- (18) 拙稿「天草版平家物語の書入れ難語句解」(私家版プリント)
- (19) Alejandro Valignano, S.I. *Sumario de las Cosas de Japon.* Tomo I. Tokyo, 1954. p. 53. 土井忠生「吉利支丹語学の研究」二五〇頁。
- (20) 拙稿「キリシタン文学」(岩波講座「日本文学史」第五卷) 二四頁。土井忠生「吉利支丹文献考」七一頁以下。
- (21) 土井忠生「吉利支丹語学の研究」二三頁以下。
- (22) 前掲(7)、三三〇頁。

〔附記〕 右に注した土井先生の「吉利支丹文献考」は、近々刊行される予定であるが、特にお許しを得て、その校正刷から引用させていただいたものである。先生の御厚情と学慮とに心から感謝の意を表する次第である。

〔昭和三七・一〇・三一稿。同三八・八月補筆〕

(本学教養部教授)